

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第28号 (平成29年3月15日)

読者数：572名(募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□ 巻頭言

観光とまちづくり

松波計画研究所代表

松波龍一



観光による地域振興というのは、なにも今に始まったことではなく、古くからのテーマである。実際にそれで大成功した地域の例もいろいろ喧伝されてきた。それらの成功例を分析して観光がまちづくりに与える効果は次の3点である、というのが定番のようだ。

(1) 経済的な活性化 (2) 交流人口の増加 (3) 住民意識の変化

実は、こういう整理学が観光の本質をはずれて、観光に力をいれてもまちづくりにつながらない原因になっているのではないかと。結果的にこういう効果があったということと、こういう効果を狙えば成功するということとは、もともと関係がない。さらに言えば、なにをもって成功と言うのかという思想的な根拠が薄弱で、現在のパラダイムにどっぷりつかった項目建てであることが、ちょっと気持ち悪い。

少なくとも、これでは順序が逆である。まず期待すべきなのは、住民意識の変化であるはずだ。

広島郊外に、さる高名な大銀杏を見に行ったら。さる神社の境内にそびえる樹齢1100年、高さ48m、根回り10.6mという堂々たる銀杏である。プチ観光名所にもなっていて、町内の案内図に必ず記載されている。

仰ぎ見て周囲を見渡すと、NTTの電柱が境内のすぐそばに立っていて少し傾いている。電話線が樹冠の下を斜めに横切っている。神社本殿の裏山には、石積みを模した化粧型枠のコンクリート擁壁がそそり立っている。入り口には錆びて穴のあきかけたトタン屋根の駐車場が無造作に放置されている。

これらに関わった人々が悪いとは思わないが、どの人もこの神々しい大銀杏に対する慈しみの気持ちをもっていなかった、というのがよくわかる光景である。これでは、たとえ大勢の観光客が訪れてたくさんお金を落としてくれたところで、「成功した」とは言いたくない気がする。

案内図に記載したり、駐車場の整理員を配置したり、記念の土産物を考案したりする前に、もっとやるべきことがあったのではないかと。

上の(1)(2)(3)という順序づけは、そのことを忘れさせてしまう。

たとえば、ある集落のお宮は小さな祠が2つ並んでいるだけのちっぽけなお宮である。しかも小高い山の中腹にあって急な階段を120段も登らなくてはならない。

信心深い、あるいは伝統を重んじる村人たちは、感心なことに年に何度も日を決めては清掃活動を続けている。しかし、最近ではみんな年だし、しんどいからそろそろ年に1度にしたらどうか、といったような話が出始める。

そこへある日、町場の人たちがやってきて、「いいなあ、このお宮は」「こういう森の中で、いい雰囲気だなあ」「村の人たちがせっせとお守しているのも、いい感じだなあ」といったよう

な、どちらかというとな責任な感想を述べる。

そうすると、村の人々は「あら、嬉しい」と思うだろう。嬉しいから、やはりきちんとお守をしよう、という気にもなるだろう。その嬉しい気持ちは、お金では買えない。

嬉しいから来てほめてほしい、というのが受け手からみた観光である。

一方、行く側からみれば、自分たちの日常と異なる体験をして、ショックを受けたり、励ましを得たり、新しい世界の見方を発見したりしたい、というのが観光である。

この双方がうまく成り立つようにするというのが、本当の観光振興ではないか？

ほめてもらえるように、ああしよう、こうしよう、というのが“まちづくり”の始まりであり、そういう意味ではまさに観光と“まちづくり”は一体のものだ。いきなり、ターゲットをどうするか、何ヶ国語の表記がよいか、どこの代理店と提携すればよいか、などと浮き足立った思案をしたところで、“まちづくり”は始まらない。

わたしの“まちづくり論”は、ナイーブ・アートのようなものかもしれないが、こういう気持ちを忘れないようにする勇気をもたないと、“まちづくり”はどんどん如何わしいものになる。

田舎町の真ん中の駐車場に誇らしげに建てられた大きな観光マップ（そこにはでかかどと〇観光協会のクレジットが記され、マップの情報はたいてい古くなっていて廃業したお店が載っていたりする）や、上げ膳据え膳の田植え体験イベントなどを見ると、実に情けない気分になる。こういう風になってしまう力学が奈辺にあり、どうすれば本来の観光と“まちづくり”を取り戻すことができるのかを冷静に解き明かすことが、研究者やコンサルタントなどの専門家の役割として求められている。

ひろしまのまちづくりの動き

① サッカー場の中央公園可能性の調査費予算化

広島県と広島市はサッカー場建設候補地として中央公園自由・芝生広場の実現可能性を調査するための費用を新年度予算に盛り込む。ただ、サッカー場整備を前提とした調査ではないという。役所の問題先送り体質がまた見え隠れする。基町団地エリアを含めた中央公園全体のあり方を決めなければ先に進まない。これは政治判断であり、行政の長の役目である。

まず、旧球場跡地をサッカー場候補地に残したことが問題であり、そのためサンフレッチェ側から球場跡地でなければ動かないという強引とも言える要求を突き付けられる。次に、自由・芝生広場を候補地として復活させたが、公園北側の基町地区住民から騒音、渋滞、違法駐車等の悪影響のため反対の意思表示。一番の問題は、東西に約200m、高さ約30mの巨体が横たわることにより、南北が分断され、眺望や風の流れがストップすることである。

北側の基町団地エリアをどうするのか？ 県営住宅はすでに解体中である。市営の中層住宅は耐用年数70年まで残し、1階が店舗付きの17号棟だけは建て替える予定という。しかし、すでに空き家も多く、築60年も経てば老朽化が進み、耐震性の不安もある。高層アパートの方は当面残すとしても中層の方は早めに壊して公園に戻すべきではないか。

識者たちが指摘するように基町団地の誕生の経緯を読み解き、その役割が終焉した時の姿を多くの市民が共有できるようにすべきである。

② 広島大旧理学部「正面保存」へ

広島大本部跡地の被爆建物「旧理学部1号館」の保存・活用のあり方を検討する有識者懇談会が、正面部分を保存し、平和教育・研究の拠点や市民の交流施設として活用するという意見をまとめた。

これを受けて広島市は市民から意見を募った上で3月末までに方針を決定する。

新年度からは懇談会の下に「平和教育・研究」と「コミュニティスペース」の専門家等による検討会を設けて意見をまとめた上で、懇談会で活用法と保存範囲を決めるという。財源の調達方法等も含めた幅広い議論がなされ、学都広島象徴として一日も早い復活を望みたい。



③ 広島「都心活性化プラン」の素案公表

広島県と広島市は1月に被爆100年後（2045年）の市中心部の将来像を描く「都心活性化プラン」の素案を公表。2月に市民から意見を募集し、3月末までに策定する。

JR広島駅周辺と紙屋町・八丁堀地区を中心とした楕円形のエリアを6ゾーンに区分けし、それぞれの特性を生かした施策を進めて都心の魅力をアップさせる方針を掲げている。

目玉施策としては、都心に存在する平和記念公園、広島城、広島市民球場、比治山公園などの地域資源を巡る「都心回廊」を設け、賑わいと交流を全体に広げていくことを目指している。

2030年までに取り組む13の具体的施策を打ち出しているが、実行に移すための体制作りも喫緊の課題である。関係する町内会や市民団体などの住民と企業などの経済界と行政の緊密な連携・協働が求められている。

○ 広島の復興の軌跡・人物編（第3回）～漁民を動かした山田節男市長～

東広島市出身。参議院議員3期。広島市長2期<昭和42年（1967）5月～昭和50年（1975）1月>。昭和40年の参院選で落選するが、2年後に浜井信三後継として社会・民社両党の推薦で広島市長に初当選。復興事業の最終段階と政令市を目指した新たな発展に取り組む。また半生を通じて世界連邦運動につくし、晩年は世界連邦都市宣言世界本部会長を務めた。

◆ 核兵器廃絶と慰霊碑の碑文論争

市長在任中は核兵器廃絶と核実験の即時全面禁止を訴え続けた。広島市長が核保有国の核実験に直接抗議したのは山田市長の時、昭和43年9月に当時のフランス大統領シャルル・ド・ゴールに対し抗議の打電をした。以後、すべての核実験に抗議電を出すのが慣例となった。

昭和45年、原爆死没者慰霊碑の碑文をめぐる論争が巻き起こった。山田市長は「再びヒロシマを繰返すなどという悲願は人類のものである。主語は『世界人類』であり、碑文は人類全体に対する警告・戒めである」という見解を示し、その後の公式見解となった。

◆ 広島平和記念都市建設法制定に奔走

同法成立のため多くの郷土出身の国会議員らの尽力があった。なかでも山田節男氏は卓越した語学力と参議院議員としての豊富な経験を発揮し、占領下という困難な条件を克服してGHQの承認取り付けに奔走した。こうして昭和24年5月9日、参議院議員102名（代表者：山田節男）が議員発議の法案提出にこぎつけ、翌々日には両院とも全会一致でスピード可決された。

山田節男先生は参議院議員としてこの法律（案）から目を離されないで、特に英文英語に堪能であられた関係もあったので、その都度問題点を検討し英文化されたものを携えては連合軍司令部に頻繁な往復を続けておられた。（元参議院法制局 枚田 四郎右衛門：追想録より）

◆ 復興事業の最終章と政令指定都市へむけて

長期にわたった復興土地整理事業は、昭和40年代に入り終了が近づいてきた。しかし復興事業地区と事業地区から外された、基町や段原などの未整備地区との格差が目立ち、次のステップの都市基盤整備を進めることが急務となった。こうして昭和40年代半ばには広島の復興を終了させる象徴でもあった「基町再開発」と「段原再開発」のスタートを切ることとなった。

一方で新しい発展に向け、「西部開発事業」（埋め立て）に着手したほか、広域合併を進めて政令指定都市への基盤をつくった。

また昭和45年3月、広島市のあるべき都市像と基本的な施策を「広島市総合計画」（第1次）として初めて取りまとめた。



昭和43年7月、市制広報番組に出演。大学院生らと「都市づくり」を語る山田市長

◆ 段原再開発事業 ～反対運動が渦巻く中で都市計画決定～

昭和44年5月、山田節夫市長は「段原再開発基本構想」を発表した。この構想は「イメージプラン」と云われ、広い道路と超高層や高層ビルが林立した、当時としては画期的な理想像で

あった。あまりの変貌に住民は驚き、やがて生活が根こそぎ失われるという不安に変わり、反対運動が激化して行った。その後、広島市は民家を借り上げて現地事務所を設け、地区住民への説明に努めた。しかし「大きな都市計画街路は必要ない」など、再開発の白紙撤回を求める住民運動はエスカレートして行く。広島市は住民の強い反対運動の中で敢えて計画手続を進め、昭和46年には土地区画整理区域(74ha)の都市計画決定を行った。

◆ 西部開発事業 ～最大の難関は漁業補償交渉～

庚午・草津・井口地区の地先水面を埋め立て、約328haの土地を造成するとともに、埋立用の土砂を採取した鈴が峰山麓に、約54haの宅地を造成する海・陸セットの開発事業である。これは、広島市が復興事業を成し遂げ、流通機能などの高次機能を備え、中枢管理都市としての地歩を築こうとする事業であった。

昭和40年、西部開発事業部が設置され昭和44年から漁業補償の交渉を本格的に開始した。こうして17年間の期間と約1,056億円の経費をかけて昭和57年に竣工した。

山田市長みずから漁業者幹部の宅へ何度となく戸別訪問された。「事の成否は別として市の考え方だけでも聞いてくれ」といった調子で再三再四にわたって70歳を超す老市長が来宅し懇請されました。ある時は粉雪の降りしきる厳寒の夜のこともありました。そうした真摯で誠実な老市長の姿に、われわれ漁業者幹部もいつしか、かたくなな交渉拒否の態度をほだされて、ついに交渉を持つに至りました。(草津かき組合長 網岡 登：追想録より)



昭和46年12月、西部開発事業の起工式でクワ入れをする山田市長

- ◆ 昭和49年10月下旬に市役所で執務中に倒れた。すでに肺がんが腰に転移しており手遅れであった。翌年1月8日、広島市民病院にて逝去。享年76歳。(編集委員 高東博視)
<参考文献> 広島県大百科事典(中国新聞社、1982年) 山田節男追想録(1976年)

□ ほっとコーナー

『五感をくすぐる毎年恒例行事』

広島県議会議員 伊藤真由美

「そ〜れっ！」ぺったん。ぺったん。年末には、我が家に昔からある台唐(だいがら)を使って、長年の親しい友人達とモチつき大会を開催しました。実はこの「ほっとコーナー」のバトンをいただいた前執筆者の三浦ひろみさんも毎年おモチつきをご一緒している仲間です。そして、次にバトンをお渡しする方も(笑)。

さて、この年に一度の「年末モチつき大会」は、毎年ほぼ12月30日に開催します。昔から祖母が29モチはいけんけえね、30日にするんよ。といていたのを覚えているからです。当分の間、使っていなかった台唐ですが、当時のなつかしさと、元来家にある古いものがいとおしくて活用しなくっちゃ！という思いから、今から20年ほど前に、玄米モチをつこう！と思い立って親友二人で復活したことが始まりです。

レンガでできた大きな竈(かまど)に薪を焚き、羽釜いっぱいお湯を沸かして、さあー！モチつきの準備です。か弱き女子二人で始めたモチつきでしたが、毎年少しずつ友人に声をかけて、今では男子も増え、おモチも上手につけるようになりました。

現在は、県議会議員として日々さまざまなことに追われるように過ごしていますが、それでもこの毎年恒例行事だけは続けています。忙しすぎて本性を見失うことのないようにと、素の自分に戻ることを教えてくれるからです。

みなさんも日々忙しすぎる毎日を送ってはいませんか？

たまにはちょっとだけ、時間と自分の五感を使って楽しんでみてはいかがでしょうか？



○ 「時代を語り建築を語る会 (第15回)」報告 語り人：カローラ・ハイン氏 ～欧米を通観しての日本の都市計画と都市計画史を語る～

世界的レベルの都市計画史の研究者としてオランダで活躍中のデルフト工科大学教授カローラ・ハイン氏にオランダ、ドイツや日本のまちの特徴等について語ってもらった。

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表：石丸紀興）

日時：2016年10月27日（木）18:30～20:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



略歴：ハンブルグ及びブリュッセルで大学卒業
1995年から1999年まで東京首都大学と工学院大学で戦後の日本都市の復興、西欧からの日本都市計画への影響等の研究
1999年からブリン・モアー大学
2015年からデルフト工科大学教授

☆ オランダのまちの形成

・冒頭、アムステルダム埋め立てによる土地造成からまちの形成までを説明するCG映像を流す。大阪湾沖に建設した関西空港をオランダ全土に展開した感じ。国土の1/4は海拔ゼロ以下。

・運河が張り巡らされた国土拡張の目的は？→江戸時代に長崎の出島ができた頃、それを見た資産家たちがビジネスのためにアムステルダムの埋め立てを始めたという。酪農のための牧草地等に利用。

（聴講者より）広島も埋め立てにより発展したまちだが、明治期の宇品港の干拓にはオランダ技師の技術指導があったという。

・オランダは1万年に1度の水害にも耐えられる構造基準。沖合に大きな堰を作って海水の干満の差を調整するという壮大な構想。

地球温暖化による海面水位の上昇等これからの課題あり。

・13世紀ごろから干拓が始まり、水利権をつかさどる水利管理委員会による民主的な運営が浸透。全員が賛同するまで徹底的に議論し、ワークショップが盛んな国柄。

・ロッテルダムはヨーロッパ最大の港。自国よりもドイツの工業のために活用されている。

・ボンネルフ（オランダ語で生活の庭）は、車は街区の外側に駐車させ、街区内は車を徐行させる工夫をした歩車道一体のコミュニティ道路とし、人間優先のまちづくり。

ボンネルフはオランダの古都デルフトが有名で、住宅街は民主的な社会を目指し、貧富の垣根がないのも特徴。最近日本でも試験的に導入されている。

・オランダの広場では多くの市民がビール片手に楽しんでいるが？→西欧の人たちはそれが楽しみであり、生活スタイルである。

☆ 日本のまちの印象等

・日本にいた頃（1990年代）、東京のまちの中にもあった人情味豊かな社会が、今は区画整理や再開発が進み崩壊しているのは残念。再開発は上手に自然を取り入れる必要あり。

・最近外国人観光客が急増しているが、効果的な対策が取られていない。各都市のまちづくりに合ったきめ細かな観光政策が必要ではないか。

・日本の戦後復興は行政主導の都市計画で進められたが、ヨーロッパでは建築家等のアーバンデザインが主流。広島は丹下健三氏の平和記念公園構想が活かされた稀有な存在。

☆ 母国ドイツのこと

・ドイツでは政治と建築がリンクしている。例えば、ヒトラー時代は彼好みのネオクラシック・スタイルの建築が隆盛。彼を嫌うモダニズムの建築家はアメリカに移住し、戦後アメリカ人としてドイツに戻って活躍した。

・ドイツの公共建築は基本的にコンペで設計者を決定。ただし、マスタープランで外壁面の位置・高さや材質・色彩等の条件が決められている。

・どうして建物の高さをそろえるの？→生まれ育ったハンブルグではまちのスカイラインを大切にす。子供の頃から3つの教会のシルエットに愛着があり、新築する場合もそれを壊さないように配慮している。

・ハンブルグの戦災復興は？→3日間の焼夷弾で町の75%が焼かれたが、石造りの町なので補修しながら復元。ただ、ビジネスシティなので、保存よりは建替えが優先される。

☆ コメント

外国人から生の情報に触れると好奇心をそそられる。

（編集委員 瀧口信二）

○人物登場：千原康弘氏（日本建築家協会中国支部広島地域会長）

東広島市在住のため地域会の役員会が始まる前に、日本建築家協会中国支部事務局（広島市内）の建築サロンで取材を行う。

☆ これまでの軌跡

小学校2年まで千葉で育ち、茨城のつくば市に引越し高校まで生活。自宅が大きな分譲住宅団地内にあり、刻々と変化する住宅建設のプロセスを目にして、興味を抱いたのが建築への関心の土壌となった。

大学で建築学科を選択し、東広島での生活がスタート。卒業後、大和ハウス工業に入社するが、住宅の大量生産に飽き足らず、設計事務所に転職。2014年に現在のC&C DESIGN ARCHITECTを立ち上げる。

☆ 建築家としての活動

今は個人住宅の設計が中心。建築の細部まで掌握できるので達成感がある。まだ代表作と言えるものはなく、自分のスタイルを確立中だが、私のデザインを気に入って注文が来る。顧客とのマンツーマンの折衝の中で、説得力等が鍛えられている。

好きな建築はフランク・ロイド・ライトのカウフマン邸（落水荘）。あの大胆なデザイン、肌ざわりのよい素材感、温かそうな居住空間を知らればファンになる人が多いと思う。

なお、C&Cは独りよがりにならないようにと戒めを込めて、千原のCとクライアント（顧客）のCを名称につけている。

☆ 日本建築家協会中国支部広島地域会長就任

建築仲間との情報交換が欲しいため2010年に建築家協会に入会。建築士会や建築事務所協会にも加入しているが、純粹に建築好きな人が集まっており、ここが一番居心地がよい。

昨年、広島地域会長に就任し、何ができるかを役員とともに模索中である。組織が小さいため何かを発信しても波及エリアが狭い現状をなんとか打破していきたい。

・建築家協会とは

利益集団ではない。公益社団法人であり、自分たちの守備範囲である建築やまちを良くしたいと思っている仲間が集まって、自分たちの活動を通して建築文化（建築の面白さやまちの楽しさ）を市民に広めていくことを目指している。支部の中に県単位で地域会がある。

・地域会長としての抱負

問題になっている建築やまちづくりに対して批判する高い職能を持った建築家もいるが、まずは身近なところから足元を固めていきたい。

例えば、「平和の鐘」をつくイベントに参加し、合わせて建築を絡めた交流会や見学会などを実施する。市民にも門戸を開き、つながりを深めていければよいと思う。

最近、まち歩き等が多く市民団体で催されているが、建築家が脚色することにより、趣向をこらした楽しい空間体験やおもてなしが可能であり、今後の課題として取り組んでいきたい。

また地域会主体の賞などを作って、良いものを社会に発信する仕組みも検討してみたい。

☆ 建築とまちづくり

昨秋、江津市で中国支部大会が開かれ、古い建物や歴史を感じさせる町並みを歩いて小旅行気分を味わった。わざわざ京都に行かなくても、近場の竹原などに行けば日本人のルーツに出会える。海外に旅して改めて日本の良さを発見するのもよいが、国内にも良い所が沢山ある。

歩いて気持ちの良い風景は残るし、市民からも愛されるので、そういう風景になるような建築を作っていく努力をしていかなければいけない。

☆ これからの夢

大志ではないが、建築を軸に語り合える仲間を増やしていきたい。建築の仕事も量より質を大事にし、いかに自分の納得のいく仕事ができるかを追求したい。

コメント

建築家にもタイプはいろいろあるが、地に足をつけて着実に歩んでいこうとする姿勢に共感する。今後の活躍に期待したい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）



略歴：1975年東京都生まれ。1998年近畿大学工学部建築学科卒、大和ハウス工業入社
2014年C&C DESIGN ARCHITECT 設立
2016年日本建築家協会広島地域会長



落水荘

○ ひろしま市民ひろばの提案！

2011年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会は、グランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめ、2013年3月に広島市に報告した。各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただき、その内容を充実させている。さらに議論の輪を広げるため、地区別に具体的な提案を順次紹介していく。

ステップ5. Fゾーンに広島らしいサッカー場を！

サッカー場の建設地が迷走し、現在Eゾーンが最有力候補に浮上しているが、むしろFゾーンの方が望ましいのではないかと。

敷地が不整形のため整形なスタジアムは難しいかもしれないが、逆にマツダスタジアムのようにユニークで面白いプランが期待できる。

計画のイメージ

川沿いのポップラ通りが観客のメインアプローチとなり、大型スロープのプロムナードからコンコースにアクセス。表玄関は西側で、車の進入等の裏玄関は東側。土手との高低差約2.5mを有効に活用。

2階の観客スタンドは東・西・北側に配置し、ブリッジで連結。南側は開放されて大型電光掲示板を配置し、中央公園側への眺望や川沿いに流れる風通しをよくする。

ポップラ通り沿いの前庭や後庭には適宜、売店・倉庫・トイレ等を配置し、試合日以外のミニイベント等にも活用できる。

コンコースは昼間に開放され、施設内に設けられたスポーツジムや体育教室等のランニングコースとして利用。勿論、市民の散歩コースとしても開放。

立地のメリット

1km圏内にJRの横川駅や新白島駅、バスセンターがあり、バス・電車やアストラムラインの停留所からも近い。四方からのアクセスは理想的であり、人の回遊性が格段に向上する。

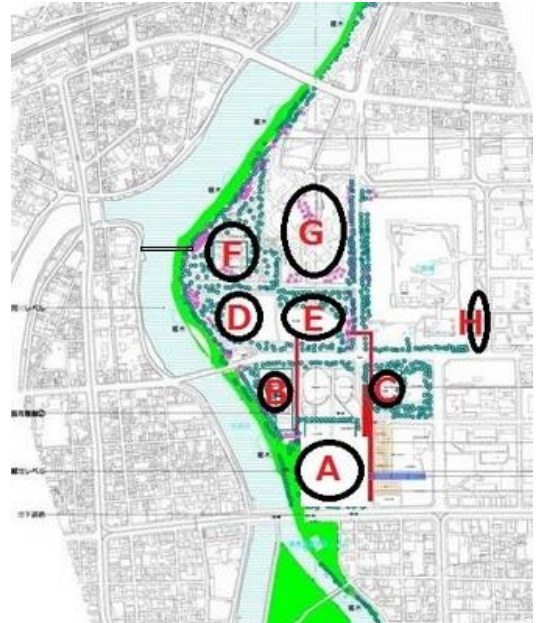
川沿いに配置することにより、基町環境護岸との一体的な整備が可能であり、本川を通して中央公園、原爆ドーム、平和記念公園へと連結できる。

実現するためには

Fゾーンに建設するためには既存の市営中層アパートの解体が前提となる。住民の理解を得ながら、期限を定めて高層アパートの空き家や他の市営アパート等への転出を図っていく必要がある。

高層アパートも川沿い側は宿泊施設や起業家等への店舗・事務室に用途変更していくことも検討。

現在の環境条件のみで判断するのではなく、未来を見据えて、現状を変えていく積極的な姿勢が行政に求められている。



全体のゾーニング計画案



Fゾーンの配置計画案

- 1 : 前庭 2 : 後庭 3 : 駐車場
- 4 : グラウンド 5 : 1階客席スタンド
- 6 : 2階観客スタンド



マツダスタジアム



プロムナード

(日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会 瀧口信二)

〇 こまちなみシリーズ ⑮

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

尾道本通り～中世から続く箱庭的都市・尾道～

「海が見える 海が見えた 五年振りに見る 尾道の海は懐かしい」、林芙美子の「放浪記」の有名な一節である。芙美子は13歳から19歳まで義父、母と三人で尾道に住み、二人の恩師によって、その文学的才能を見出された思い出深い町である。

JR尾道駅を降りて東へ2、3分のところにある林芙美子像を起点に一番街、中商店街、本通り商店街…と続く東西に貫く1.5キロ。レトロな雰囲気漂う商店街が「尾道本通り」である。



尾道は中世以降、北前船の寄港地として物資の集散地として栄えた商都である。明治時代にはいち早く銀行、商業会議所(現在の商工会議所)などがつくられ大いに栄えた。

尾道本通りは千光寺山裾に沿って走るJR山陽本線、国道二号線の南側に位置している。そぞろ歩くと、本通りから尾道水道に向かって枝葉のように小路がある。18もあるそうで、その道幅も2m位のものから人ひとりやっと通れるものまで…。渡し場通り、荒神堂通り、浜の小路などがあるが、もっとも狭いのが「あなごのねどこ」。小路の多いことについて観光協会の方は「昔は間口で税金が掛けられたので、間口は狭く、奥行きがある家が建てられたためでしょう」と、出入りに便利なように小路がつけられたのだそうだ。そういえば古い家並の残る三次もそうだった。

刃物を扱う店に入ってみた。450年の歴史があるそうで、美術刀剣から実用刃物を扱っている。「広島でこういうお店、見かけなくなりましたね」「そうですね。良いものをお求めの方は遠方からお見えになり、研ぎのため宅配便で送ってこられますよ」、私も小振りの包丁一本買い求めた。かつて銭湯だったところが菓子、雑貨など土産物を扱い賑わっている。お茶屋さん、呉服店…、バラエティに富んだ店が並ぶ。珈琲店もスタバやドトールなどは見当たらず、広島にも進出している元気な珈琲店もある。自転車屋を改装して小物を扱うお店の店主は20代の女性、手作りの品を求めて観光客も足を運ぶ。

尾道は文学そして映画の町。地方都市では映画館が無くなったが、本通り入口に「シネマ尾道」がある。ラインアップをみると「オケ老人」「シュガー・ブルース」「狂い咲きサンダーロード」など、ちょっとマニアックなものが多い。古くは小津安二郎の「東京物語」、尾道出身の大林宣彦の「転校生」「さびしんぼう」「時をかける少女」尾道三部作のロケ地になっている。最近フジテレビの「月九ドラマ」のロケが行われたため、若い人の観光客が増えているそうだ。因みに2015年の入込客は674万人。



林芙美子像



尾道本通り



あなごのねどこ

お昼時だったので海の近くの鮨などの和食の店に…、やはりネタが新鮮、美味しい。暫くしてアジア系のお客、春節休みで香港から来た二人連れ。すると女将さんが i-pad を二人の前に、これを見てもらい注文を受けるのだそうだ。昨年の外国人客は21万人、電子マネーが使えるお店も増えている。

尾道は山陽道、中国横断自動車道、しまなみ海道（サイクリストの聖地になりつつある）が交差する「瀬戸内の十字路」、サイクリストの宿として倉庫を改装したU2…、尾道水道に面した雁木などは姿を消し、海岸線は護岸工事で綺麗な遊歩道に衣替えしている。

雁木のない尾道は小津の世界が消えたようなもの、あの1.5キロの尾道本通り、さびれていく運命にあるとしたら…、是非古きものも残って欲しい、と願うのはよそ者の独りよがりだろうか。

(編集委員 三宅恭次)

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第16回)」開催

- ・語り人：濱井義樹氏（呉市都市部副部長）
- ・テーマ：呉市における都市政策を語る一過去から現在・未来に向けて
- ・開催日：2017年3月25日（土）18：00～20：00
- ・会場：合人社ウェンディひと・まちプラザ 研修室C（北棟5階）
（旧広島市まちづくり市民交流プラザ）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込の連絡先：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226 メールアドレス：nisimar5@hotmail.com
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）

□ 編集後記

「介護期間は、ざっと10年」

健康寿命とは、WHO(世界保健機構)が提唱した指標で、平均寿命から衰弱・病気・痴呆などによる介護期間を差し引いたものだが、2013年では、日本が男子71.11歳、女子75.56歳で世界188ヶ国中ともに第1位だったと報道された。(日本経済新聞)

この年の日本人の平均寿命は、男性が80.21歳、女性が86.61歳でやはり世界1位だった(厚生労働省)ので、差し引いた年数が介護期間と推定される。ざっと10年となる。

人々の不安や苦しみが増大し、明日の希望が見えなくなっている今、内向き志向は、進んでいる。そもそもまちづくりは、個々では成し得ないことを集まり暮らす人々の合意により実現する。内向き志向は、合意をほど遠くし、関心すらもてなくなっていく。

こんなときだからこそ、固有性を大切にし、歴史沿革を尊重して、自然や環境に育まれた合意づくりに一層踏ん張らなければ、と考えるこの頃です。

(編集委員 前岡智之)

*メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて

皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！

(投稿は500字程度以内でお願いします)

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員